

# 26Y-am04

## オキサリプラチン投与がラットの勃起機能に及ぼす影響

○片岡 智哉<sup>1</sup>, 堀田 祐志<sup>2</sup>, 前田 康博<sup>2</sup>, 川出 義浩<sup>2</sup>, 木村 和哲<sup>1,2</sup> (1名市大院医, 2名市大院薬)

### 【目的】

近年の診断技術の発展や治療法の進歩も伴い、今やがんは不治の病ではなくなりつつある。本邦ではがんサバイバーが 500 万人存在し、現在のがん治療においては、がん罹患後のサバイバーシップにまで視野に入れたケアプランの構築が必要である。しかし、抗がん剤が男性性機能へ及ぼす影響に関する論文もほとんど存在せず、その影響は不明である。そこで本研究では、ラットを用いて抗がん剤が勃起機能に及ぼす影響を薬理学的手法により検討した。

### 【方法】

12 週齢雄性 Wistar-ST ラットを用い、抗がん剤としてオキサリプラチン(L-OHP)投与群、コントロールとして vehicle のみを投与した Control 群の 2 群を作成した。L-OHP 群には末梢神経障害発症モデルラット作成に用いられる投与量(4 mg/kg/day)を 1 週目の 2 日間に静脈内投与し、L-OHP 投与後の 4 週間後の勃起機能を検討した。評価項目として海綿体神経の電気刺激下の海綿体内圧(ICP)測定法を用い ICP/MAP で勃起機能を評価した。また、陰茎海綿体組織において、各種勃起機能関連因子の発現変動を real time PCR 法により検討した。

### 【結果】

L-OHP 投与の 4 週間後、Control 群では ICP/MAP が  $0.71 \pm 0.04$  であったのに対し、L-OHP 投与群では  $0.34 \pm 0.05$  と有意に低下することが観察された。

### 【考察】

本研究により、抗がん剤投与により勃起機能を低下させる可能性が示唆された。今後の化学療法では、性機能障害も視野に入れた対応が必要である。